

(様式3)

農業研究成果情報

No. 805 (平成29年5月) 分類コード 02-09 熊本県農林水産部

露地「肥の豊」の簡易樹体被覆栽培では、3月収穫の樹成り完熟果実は3割程度とする

簡易樹体被覆栽培「肥の豊」では、1樹あたり1月に7割収穫し、3月収穫を3割にすると、連年安定して生産ができる。また、3月採取果実は、1月採取果実と比べ糖度が高く、食味が向上する。

農業研究センター天草農業研究所 (担当者: 山添純歌)

研究のねらい

本県の主要柑橘である露地栽培「肥の豊」において、高品質で食味良好な樹成り完熟果実を連年安定生産するための栽培管理技術を確立する。

これまで、簡易樹体被覆資材(資材名:iネルコート)による被覆栽培で、水腐れ症の発生を軽減できる(農業の新しい技術No.620)ことを明らかにしたが、全果実を3月まで樹上に成らせておくと、樹勢低下や翌年度の着花・着果不足が懸念される。

このため、簡易樹体被覆栽培における安定生産のための適正な3月収穫量を明らかにする。

研究の成果

1. 11月下旬に樹体被覆(被覆資材:iネルコート)し、1月下旬に7割収穫し、3月に残り3割を収穫する3割区は、3月に5割収穫する5割区および1月に収穫せず3月に全量収穫する全量区に比べ、収穫量の変動率が小さく、連年安定生産できる(図1)。
2. 樹当たりの4年間の累積収量は、3割区で最も多く、次いで5割区、全量区で最も少ない(図2)。
3. 果実品質は、3月収穫した果実は1月収穫より糖が高い。また、3月収穫割合の違いによる果実品質の差はなかった(表1)。

普及上の留意点

1. 本成果は、所内の露地栽培「肥の豊」(H22年時、9年生)で、H22年産から11月下旬～収穫期まで樹体被覆を行い、毎年同じ樹を用いた結果である。
2. 本成果は「肥の豊」であるが、「不知火」でも同様と考えられる。
3. 3月に収穫する果実は被覆資材によるすれ傷を避けるため、樹冠内部の果実を中心に残す。

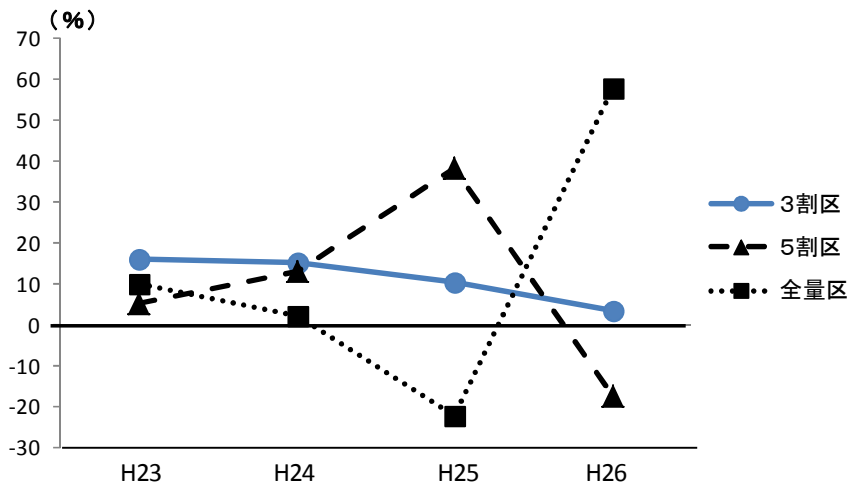


図1 3月収穫割合が収穫量に及ぼす影響(変動率)

- 注1) 変動率=(当年産収穫量-前年産収穫量)/前年産収穫量*100
- 注2) 収穫量は1月及び3月の合計
- 注3) 値は0に近づくほど隔年結果性が小さい

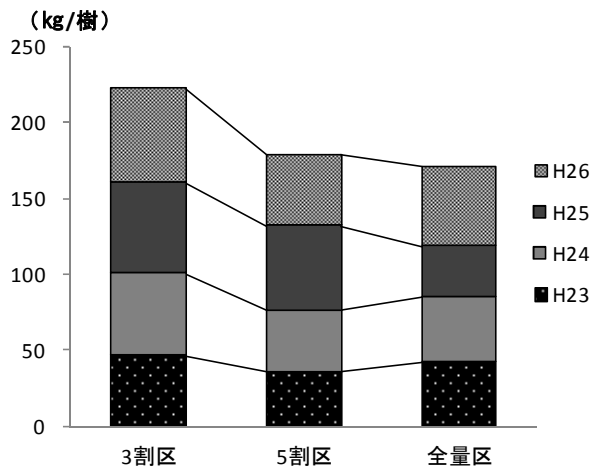


図2 3月収穫割合が累積収穫量に及ぼす影響

- 注1) 収穫量は1月及び3月の合計

表1 3月収穫割合毎の果実品質の推移

項目	3月収穫割合	H25年産				H26年産			
		12月	1月	3月	1月収穫貯蔵果実	12月	1月	3月	1月収穫貯蔵果実
糖度 (brix)	3割区	12.5	14.8	17.2	15.8	11.0	12.9	14.6	13.7
	5割区	12.5	14.8	17.9	16.8	11.1	13.3	14.4	14.0
	全量区	12.5	14.9	17.5	-	11.1	-	14.7	-
クエン酸濃度 (%)	3割区	1.16	1.04	0.86	0.78	0.99	0.94	0.76	0.69
	5割区	1.18	1.03	0.90	0.86	1.22	0.99	0.84	0.76
	全量区	1.20	1.13	0.90	-	1.05	-	0.74	-

- 注1) 各月下旬に果実を採取し調査した
- 注2) 貯蔵果実は3月下旬に調査した